家族で渡った満州での悲しみと別れ

厚木市支部　篠田　欽次（子）
戦没者　篠田　幸一
戦没地　シベリヤ

あの戦争で私は父、篠田幸一を頼もしく思った。其れは開拓団で、現地召集されて牡丹江の兵事部へ向かう途中、図佳線沿線では牡丹江に次ぐ大きな街の林口駅の手前古城鎮と言う駅に停車していた時のことである。はるか東南の彼方から、爆音と共に数機の飛行機が見えた。日本の飛行機だ。友軍機だ。と喜んだのも束の間、その飛行機はソ連の飛行機で林口市街めがけて機銃掃射を始めた。一機また一機と上空から高度を下げながらプロペラのあたりから火を噴いている。この火を見て「やった！」「落ちる！」「落ちる！」

「友軍の高射砲で敵機が撃墜されたのだ」と喜んだが、それは全然見当違いで、高度が下がった敵機は、急上昇していった。落ちると思っていた敵機のプロペラあたりからの火は機銃掃射の火であったのだ。

「日本の飛行機はどうした！」「友軍機は飛びたたないのか！」「高射砲はどうした！」と、誰かが叫んだ。皆同じ気持ちだろう。

©2011_財団法人神奈川県遺族会

対岸の火事ぐらいに思って怒鳴ったり、野次ったりしているうちに一機が古城鎮に向かってきた。

「来るぞ！」「来るぞ！」「逃げろ！」

誰かの叫びと共に、皆一斉に腰丈もある高さの無蓋車の枠を飛び越えて、クモの子を散らすように、めいめい勝手な方向に逃げた。私は列車の進行方向左の高粱畑へと駈けた。

「欽次、危ない！」「こっちへ来い！」父の怒鳴り声に、ただあわてて何が危ないのか分からず、父の走る方へ行った。列車の走る後方左前方に土橋があったので、その下に潜り込んだ。走る途中一回目の機銃掃射が、青々と茂った高粱の葉に裂傷を残していった。もしもこの時、父幸一の言うことを聞かなかったらソ連の飛行機によって重傷を負ったか、死んでいたであろう。土橋の下で身を縮め二回三回と繰り返される機銃掃射を見ながら、さすが実戦の経験をした父だ、この土橋の下なら安全だと感心した。

昭和二十一年九月十四日、胸にそれぞれの出身地と行き先を書いた白布を縫いつけて、北安駅より汽車に乗った。ところが列車は慶安駅を通過した。車内は騒然となった。

「だまされた！」

鶴崗炭坑に連れて行かれた。鶴崗での宿舎は、満州国時代日本人が、中国人労働者を炭坑で働かすために作ったお粗末な宿で、義勇隊出身の若者ばかりで、私は異常なまでの恐怖心を抱いていた。これは大変なところに入れられてしまった。何とか此処を逃げ出す方法はないものかと考えた。

©2011_財団法人神奈川県遺族会

昭和二十二年の秋、鶴崗炭坑在住の長野県人会があった。その中に森岡はつえさんがいた、開拓団当時、私ははつえさんのことは知りませんでしたが、はつえさんは私のことを知っていたらしく、汽車の中で知り合った佐久さんに一通の手紙を渡した。その手紙には、二年前に祖母レイ、母ウメヨ、弟金三がすでに死んでしまっていることが書かれていた。

手紙は、終戦直後の物資のない時代だったので、粗末なワラ半紙のような帳面を破いて便せん代わりにしたものだった。

ワラ半紙に書いてある鉛筆の跡は、読むほどに、見るたびに泣けて仕方がなかった。二十年八月九日別れて以来、ただ再会だけを楽しみに、心の支えに、辛いことも、苦しいことも、殴られても、叩かれても、飢えも、寒さも、耐え忍んで来たのに、何で私一人がこんな酷い悲しい思いをしなければならないのか、この世には、神も仏もないのか・・・。

私は一番哀れなこの世の不幸を一人で背負いこんだ最も哀れな者のように思えて、来る日も来る日も人目を避けて、暗い坑内や粗末な寝床の中で涙に暮れた。森岡さんの手紙を疑い、ウソであってくれればよい、人違いであってくれればよいと、何度も考えた。しかし終戦直後以来、目のあたりに見てきた同胞の、悲惨な最期や惨状の現実は、私の家族だけを、除いて考えることの出来ない悲しい事実ばかり、あながち人違いでもなさそうな気になって、また悲観に暮れた。

後日、弟篠田金三は大八浪開拓団が開拓地に一番近い閻家駅に集結した際、富興屯の篠田家まで馬車と食糧を取りに行った帰り道、老街基屯を通過する時、土民に襲われた。腰に差していた篠田家の日本刀を奪われ全身に切り傷を受け、命からがら開拓団の集結地、東興屯まで逃げてき

©2011_財団法人神奈川県遺族会

た。

門番に立っていた金三の同級生、小林和博は、全身血だらけの金三を見たが、誰だか分からず「誰だ」と問いただすと、「篠田金三」と言うなりその場に倒れたという。

そして三日後の昭和二十年八月十三日午後、満十五歳二ケ月と十日の短い命だった。

金三死亡後、力を落としつつも、母ウメヨと共に山河を越え、原野を歩き母の背中で行軍した祖母は連日の強行軍と、過度の疲労のため、七十歳と六ケ月の老脚はむくんで腫れ上がり、体力つきて大森林の中の牡丹江川に差し掛かったとき、祖母は締めていた帯を解いて、母ウメヨに渡し母が泣いて止めるのを振り切って、牡丹江大河の中に身を沈めてしまった。昭和二十年八月二十六日午前十時半頃だった。金三が死んで十三日後の出来事である。

金三、祖母レイが死んだ後、母ウメヨは満州国三江省方正県伊漢通開拓団本部屯まで大八浪開拓団の人たちと、共にたどり着いた。

野宿に次ぐ野宿と強行軍の疲れ、食料不足のため極度の栄養失調になり、それに八月大八浪開拓団を出る時、身にまとった単衣一枚に加わる北満の寒さに耐えきれず、昭和二十年十一月二十四日、午後六時四十分頃、息を引き取ったと聞く。三十三歳と九ケ月の生涯だった。

祖母、母、弟金三が亡くなった事を知った後も、父篠田幸一がシベリヤから一足先に帰っていて私の帰りを待って居てくれるであろうと考え直し、其れを生き甲斐にと言うか父の存在を頼りに生きてきた。ところが、昭和二十八年五月十五日舞鶴へ帰って見ると、父幸一は私と別れた三ケ月後、昭和二十一年三月十二日にシベリヤ収容所で亡くなっている事を叔父である川手善人が

©2011_財団法人神奈川県遺族会

舞鶴へ迎えに来た時に教えてくれた。

昭和十五年の四月、生まれ故郷の家、田、畑を売り払って一家五人で満州の開拓地に引越した。そして十三年後、舞鶴港では私一人となりて、落ち着き先を何処にしようか、途方に暮れた。長野に帰っても生活の基盤となるものは何もない、みな人手に渡っている。二十四歳にもなって、親戚にも頼れない、食うためには仕事を探さねばならない。私の職業経験と言えば満州での開拓団、ソ連シベリヤでの赤松の伐採、中国炭坑での炭坑夫である。それだけでは現実の日本では何一つとして通用しない。早く技術を身につけ、その技術を職業として行くには、自動車の運転手が一番早いと考えた。金がなく、運転免許を取得するには、自動車運転手の助手になる、助手なら給料も入るし道路も覚えられ、免許証が取れる。

そんな自分勝手な淡い望みを抱いて。赤羽にある和田運輸に就職し、関東電気工事、王子運送、アマダと職を変え現在に至りました。

©2011_財団法人神奈川県遺族会